西上州の山岳信仰 上

Mountain Worship in the Nishi-Joshu region 1st

堀　越　教　之*
Kyoshi Horikoshi

キーワード：山岳信仰，普寛行者，普寛講，御嶽信仰，小沢岳，兄倉山
Key words : Mountain worship, Fukan performer, Fukan Fraternity, Mt Ontake Worship, Mt Ozawatake, Mt Anikurayama

はじめに

「下仁田ジオパーク」に関連した山々は，かって山岳信仰の聖地であった．西上州の千メートル前後の山に上ると，その山道の尾根や山頂に多くの石造物が祀られている．重い石造物をどのようにして尾根や山頂に上げたのか．そしてそれを支える精神力は何であったのか．

以前からこのことに興味を持ち，西上州山岳における石造物の形態と分布の概要，その制作年を調査した．石造物形態の意味については，山岳信仰の概要を理解しないとわからないので，山岳信仰の歴史について，大まかに述べてみたい（第1図）．

第1図　西上州の山岳信仰の分布（御嶽講社）

山岳信仰とは，山岳に宗教的意味を与えて尊崇し，山岳や山林を修行の場として宗教的儀礼をおこなうもので，山の多い日本における宗教として日本宗教史に特徴ある地位を示してきた．下仁田ジオパーク内の山岳信仰は近世末に集中されるが，山々に点在し祈りの対象とする尊像は古代からのそれを引き継いでいる．

古代・中世の山岳信仰

山に対する畏敬と山の神

古くから日本人は，山に対する神秘性から山に神霊の伏在を信じ，山や山里の実生活と結びつく安全の祈りの原始宗教形態が生まれている．自然への感謝と畏怖は，アイヌ語のカムイがカミ（神）になったという説もある．西上州の民も，山を生活の場とする事が多かったことから，山への感謝と安全を願う「山の神」信仰は今日まで存在している．

古代山岳修行者と修験道の誕生

山には死霊が集まるとする見方があり，恐山や立山の信仰はこれにあたる．また古代から吉野大峰山

2022年2月18日受付．2022年2月28日受理．
＊〒370-2615　群馬県甘楽郡下仁田町宮室61番地　常光寺

や比叡山には山林修行の目的で修行者が訪れていた．奈良時代中期には道教や仏教の影響を受け，山の死霊と交媒し霊鬼を排除する修行者がうまれ，修験道が成立する．役小角（えんのおずの）の伝承は，初期山岳呪術者の姿を伝えている．

役小角

役小角は，飛鳥時代から奈良時代に呪術者として活躍した実在の人物であり，修験道の開祖とされ，役行者（えんのぎょうじゃ）と呼ばれている．役小角が文献に登場するのは，『続日本紀』（国宝社編 1992）と『日本国現報善悪霊異記』（講談社編 1980）（『日本霊異記』とも言う）である（第2図）．

第2図　下仁田町南野牧廣澤虎之助家に伝わる「金峯山寺本堂」 御札中に描かれた役行者

『続日本紀』は官選による日本六国史の第2番目の歴史書で，797（延暦16）年に完成した．基本的には創作された話が入る性質のものではなく，皇室が編集を命じた歴史書である．

この『続日本紀』に役小角の記載がある．「文武天皇3年（699年）5月24日　役行者小角を伊豆嶋に配流した．はじめ小角は葛木山に住み，呪術をよく使うので有名であった．外従五位下の韓国連広足の師匠であった．のちに小角の能力が悪いことに使われ，人々を惑わすものであると讒言（ざんげん）されたので，遠流の罪に処せられた．世間のうわさでは『小角は鬼神を思うまま使役して，水を汲んだり薪を採らせたりし，若し命じたことに従わないと，呪術で縛って動けないようにした』といわれる．」

金剛蔵王大権現

役小角は貴族との交流があったことにより貴族の吉野詣でが盛んとなった．また神道と仏教の習合（本地垂迹）思想により，「金剛蔵王大権現」が出現し，修験道の本尊となり，貴族の信仰をあつめた．金剛蔵王大権現は，役小角が感得したもので，釈迦如来，十一面観世音，弥勒菩薩の集合体である（第3図）．

第3図　「金峯山寺本堂」御札に描かれている「金剛蔵王大権現」

時代は下って江戸時代の1799（寛政11）年1月25日，光格天皇は役小角の1100年御遠忌に神変大菩薩の諡（おくりな）を贈った．七，八世紀には大峰山以外にも修験道の山岳開山が行われ，出羽三山を能除（生没不明），日光山を勝道（735～815年），箱根山を万巻（720～816年），白山を泰澄（620～767年）が開山している．

平安時代後期には，最澄，空海の山岳仏教の提唱で山岳修行が行われ，比叡山では最澄の弟子相応が千日回峰行を始め今日まで伝えられている．千日回峰行は単に回峰するだけでなく，山川草木に感謝し祈りをおこなう修行である．

鎌倉時代

武士道と併行して修験道は盛んとなり，山岳修行で得られた力，これを験，験力と言い験力を使って

人々の病を治し，災難を除災する行為が行われるようになる．

また金剛蔵王大権現を中核に，教義，儀礼，組織を整理充実させ，全国各地の山岳に修験道は広められた．吉野の御嶽，大峰山金剛山寺の信仰は地方的展開がおこなわれ，木曽御嶽，金峰山，蔵王が山岳信仰の聖地となった．

古代から鎌倉期までの山岳宗教通史を述べたが，ここに登場した役行者，座王権現の尊像は，西上州の山々にも点在する．役行者の石像は，金剛萱，兄倉山，小沢岳にあり，金剛萱の尾根の石像には神変大菩薩の諡（おくりな）が刻まれている（第4図）．

役行者の感得した金剛蔵王大権現は江戸時代後期の御嶽教普寛講に引き継がれ「御嶽山座王大権現」となり，御嶽三神の中心としての本尊となるが，「蔵王」が「座王」となっていることに注意すべきである．この石像は，兄倉山，金剛萱山頂，四又山山頂第二峰，秋葉山山頂に祀られている（第5図）．

第4図　金剛萱の役行者

第5図　四ツ又山山頂第二峰にある「御嶽山神座王大権現」の石像

近世以降の山岳信仰

講の成立

江戸幕府下の宗教は，厳格な幕藩体制のもとで管理され，新宗教・新宗派の設立は一部の例外を除いて，認められない時代であった．しかし庶民は，「講」という組織をつくり，信仰体制を維持した．「講」とは本来，仏教の経論を講説する法会（ほうえ）を言った．平安時代の法華八講や仁王講などが有名である．

転じて仏菩薩や祖師や高僧の徳を讃える集会も講と言うようになった．涅槃講や太子講がそれにあたる．庶民の間では，民間信仰に基づく日待講や庚申講を行った．また純経済的目的の講も行われ，無尽講が生まれ，講の親和性を保つことから無礼講の言葉も生まれた．江戸時代は居住地を離れることは許されなかったが，講を組織し信仰の聖地を旅行することは許された．熊野詣の熊野講，富士山登山の富士講，大山参りの大山講，御嶽登山の御嶽講などである．

江戸時代の木曽御嶽信仰は，中期以降一般の人が軽精進で入山できるようになって盛んになった．覚明行者と普寛行者の功績が大きい．西上州の山岳宗教と関連ある講組織は御嶽講社であり，中でも普寛行者とその弟子達の流れを組む先達による普寛行者を信望する講中である．普寛行者の石像を建立し，崇拝する特徴を持った講組織であり，地名からとった宮本講中，南蛇井講中，馬山講中などが存在した．

普寛行者

普寛は1731（享保16）年秩父大滝村落合に生まれた．現在の秩父市大滝で，普寛神社となっている場所である．幼名を木村好八と言った．父は秩父神陰流の剣豪，木村信次郎であり，好八も父から剣術を習い，名を木村左近といった．1754（宝暦4）年江戸に出て浅見家の養子となる（第6図，口絵2－①）．

第6図　金剛萱の普寛行者石像

上野寛永寺に詣でたとき，修験道の行者と出会い感銘を受けたという．当時，寛永寺は修験道の総元締を兼ねていた．修験道を目指し，基礎勉学に入る．秩父神社で漢学を学び，三峯神社で神道を学ぶ．三峯別当髙雲寺の日照法印の元で得度し，本明院普寛と名乗る．日照法印から天台教学を学び，秩父両神金剛院から真言密教を学ぶ．

1782（天明2）年から1792（寛政4）年にかけて，木曽御嶽新道開発の旅に出て木曽御嶽王瀧道を開辯する．1792（寛政4）年江戸日本橋に御嶽教道場を開く．武蔵の国，上野の国及び越後を順錫，上州武尊山，越後八海山を開山．1801（享和元）年武蔵国の本庄宿で遷化，71歳であった（第7図）．

第7図　秩父大滝　普寛神社の普寛像

普寛行者と信者

普寛行者とその弟子達は，独特の宗教活動を行い信者を獲得していった．山岳修行で得られた力を験力と言うが，験力を持って病気の治療や除災を行い，信者にも山岳登山と修行を行わせる活動である．御嶽信仰の特性は，「御嶽講社」と呼ばれる講の集団が存在し，御嶽信仰を支えている．そして講集団の中核に，御嶽行者と呼ばれる行者が存在することである．行者には「前座」と「中座」の役があり，信者は「講元」「世話人」「信者」によって組織される（第8図）．

第8図　普寛神社の絵馬

宗教儀礼の特徴は，シャーマニズム的憑依儀礼にある．「前座」が神霊に憑依祈祷（ひょういきとう）をおこない，神霊は忘我状態となった「中座」の口から予言・託宣・卜占・治療の答えをするというものである．これを「御座」または「御座立て」という．

この宗教儀礼の後，御嶽山神を祀った山に登山修行を行う．「六根清浄」の掛け声で登山が開始されるが「六根」とは眼耳鼻舌身意であり，これを清浄に保つことは仏教思想である．さらに中国思想の「気」とからめ，六根が清浄した状態を「気が晴れる」と表現し，気晴らし登山という言葉も生まれたという（第9図）．

幕藩体制の崩壊と明治新政府の方針により，宗教界に大きな変化がおとずれた．廃仏毀釈と神仏分離である．特に御嶽教は，神と仏を一体として行の形態が成り立っていた．分離することは困難であったが，どちらかの選択をしなければならず，仏教系と神道系にわかれたが，大方は神道に移行した．

1888（明治21）～1894（同27）年に日本に滞在したイギリス人，W・ウエストンは，御嶽山にも登山

第9図　四ッ又山の普寛行者石像

し，その記録を『日本アルプス・登山と探検』として出版した．明治20年代の御嶽信仰登山の様子を知る上で貴重な資料である．同書第13章に木曽福島から登山した様子が書かれ，「日本の巡礼登山は，信仰の名を借りた物見遊山である」と述べている（ウエストン 1976）．

普寛行者の功績は，御嶽信仰の大衆化をはかったことにある．木曽御嶽まで出かけなくとも，身近な山岳を霊場にし，庶民の心のよりどころとしたことである．普寛行者が下仁田の山々に登山したという記録は無い．おそらく弟子や孫弟子の行者達が開いた山々であろう．御嶽講社で普寛行者を尊崇する講中が開いた西上州の山は，兄倉山，小沢岳，金剛萱，四ッ又山，秋葉山，日暮山，西野牧時丸，神成山，妙義金鶏山である（第1図）．

江戸時代幕末の頃，下仁田に入る道は小坂坂峠道であっただろう．当時の小坂坂峠の出口は霊山寺の裏に出る道であった．この高台から兄倉山が正面に見え，金剛萱，小沢岳，四ッ又山が連なって一望出来る．普寛行者の教えを頂いた弟子たちは，この山並みを見て，木曽御嶽山の神々を，この山々に祀り，御嶽講社の霊山にしようと決意したことであろう．

御嶽講社の行者は，あまり文書記録をのこしていない．「御座立て」の模様や山岳修行を記録しなかったのであろうか．そんな中，講中の設立を講社に願い出て，許可となる文献が見つかった．1883（明治16）年10月19日に青倉村の大社の長，神戸惣三郎が役員6人の名を連ね55人を代表し，宮本講大社長浦野久次郎を介し，神道御嶽教管長大教正平山省齋に宛，入社願いを提出したものである．許可になったのは1884（明治17）年3月1日であった．

小沢岳の御嶽信仰

小沢岳の山容

小沢岳は下仁田町の南方に位置し，頂上から下る北側稜線は南牧村との境となっている．山名は，南牧村小沢（旧小沢村）に由来する．標高は 1089 m，独特の山容を持ち，特に安中市や富岡市からの山容は鋭峰を描き，西上州のマッターホーンとも呼ばれて，地元の人々から親しまれている（第10図）．

第10図　下仁田町自然史館（旧青倉小学校）からの小沢岳

下仁田町自然史館・旧青倉小学校の敷地には，かつて下仁田町立青倉中学校が併設されていた．1966（昭和41）年に下仁田町立東中学校に統合され青倉中学は閉校となったが，この旧青倉中学校の校歌に小沢岳がうたわれていた．旧青倉中学の校歌を覚えている人も少なくなったことであろう．

小沢岳の山岳信仰

小沢岳もかつて御嶽教信者の講中によって開かれた信仰登山の山であった．山頂には，文化6年（1809年）に建立された大日如来の石像が安置されている（第11図）．

智剣印を結ぶ立派な石像であるのに，『下仁田の石造文化』にも『南牧村の石造文化財』にも取り上

げられていない．山頂が下仁田町と南牧村の境界となっているため，双方から遠慮されたのであろうか．建立者の銘記は無いが，おそらく小沢村住民により奉納建立されたものであろう．大日如来は小沢の方向を見おろしている．

第11図　頂上の大日如来

小沢岳山頂の大日如来

小沢岳は山岳信仰の観点から見るかぎり，南牧村の山である．山頂の大日如来座像の建立から，次に古い石造物が登場するまで60年間の空白があるが，江戸時代後期から昭和十年代まで，宮本講中の傘下の旧小沢村の先達によって栄えた山である．

小沢弁天堂の手前に御嶽行者の詰め所があり，ここを拠点に，峰の村落から尾根に登り，尾根づたいに山頂を目指す信仰登山道が開かれていた．

かつて尾根の参道には，御嶽教に関連した石造物が点在していた．大日尊文字碑・倶利伽羅龍王（記銘年号，以下同様，慶応4（1868）年），普寛行者2体（明治3（1870）年，同7（1874）年），役行者（明治4（1871）年），御嶽山座王大権現，八海山提頭羅神王，三笠山刀利天（御嶽山三神，明治6（1873）年），十二大権現（明治9（1876）年）等である．

ところが1943（昭和18）年に地元の人たちと秩父セメント株式会社が青倉石灰工業株式会社を設立し，小沢に工場を建設し，採石を開始した．小沢の峰から下仁田町青倉にかけて石灰石の大鉱床があり，良質であることから上州石灰として知られていたためである．小沢からの登山道は採石場となり，点在していた石造物は，一カ所にまとめられ，大平と呼ばれる尾根に祀られた．

御嶽教の石造物

小沢集落から小沢岳に登る登山道に祀られた石造文化財が，尾根の何処に祀られていたかを知ることは出来ないが，大平にまとめられた石造物は貴重な文化財である．

（1）御嶽山三神

①　八海山提頭羅神王（第12図）

②　御嶽山座王大権現（第13図）

③　三笠山刀利天（第14図）

この三神が御嶽山信仰の中心を成す礼拝物である．神仏習合の神であり仏（権現）である．

第12図　八海山提頭羅神王

第13図　御嶽山座王大権現

第14図　三笠山刀利天

(2) 倶利迦羅龍王（第15図，口絵2－②）

不動明王の変化身である．密教では，大日如来が梵字の「カン」に，「カン」が剣に，剣が不動明王となることを観相（判断）する（第16図）．剣が不動明王となる姿をあらわしたものが倶利迦羅龍王である．大変珍しい石造物であり，下仁田，南牧ではおそらくこれ1体のみであろう．

第15図　倶利迦羅龍王

第16図　梵字「カン」
加治由幸 HP

(3)『大日尊』文字碑（第17図）

大日如来を大日尊として円相の中に書いた碑である．倶利迦羅龍王とともに慶応4（1868）年の年号が刻まれている．慶応4年は年表の中からは抹消されているが，実際には，9月7日まで存在した．明治政府は，「慶応4年をもって明治元年とする」ことにより，旧暦1月1日に遡って適用されたのである．

第17図　『大日尊』文字碑

(4) 十二大権現（第18図）

御嶽山岳信仰独自の石造物で，子供を抱く姿は，木曽御嶽山に大きな像が祀られているが，西上州には，小沢岳のほか吉崎の兄倉山に確認される．

第18図　十二大権現

(5) この他，役行者・普寛行者の像・石室などが大平に集められている．

役行者の像は，錫杖を左手（普通は右手）に持つ珍しい像であり（第19図），金剛萱の像（第4図）も同様である．

第19図　役行者

兄倉山（吉崎御嶽山）の御嶽信仰

兄倉山（吉崎御嶽山）

御嶽信仰により，各地に御嶽山の名が登場するのが江戸の後期から明治初期である．

吉崎御嶽山が以前どのような名で呼ばれていたかは定かでないが，1983（昭和58）年に刊行された『上野国郡村誌8甘楽郡(1)』の上野国甘楽郡吉崎村に兄倉の名が登場する．この書籍の原本は，1875（明治8）年明治政府内務省が指示して，各町村誌をまとめ，地理局に提出したものである．ここでは兄倉山としておく．標高は 576 m（国土地理院）である．

江戸時代から明治にかけて，下仁田に至る街道は小坂坂峠道であった．峠を下って下仁田に入り霊山寺の裏側に出ると展望は開け，ジオサイトの山々が出現する．御嶽教の行者達もこの地から，山岳信仰登山の山をどこにするか見定めたことであろう．正面に大きく構え立派な山容を見せるのが兄倉山である．現在は吉崎御嶽山の名で親しまれている（第20図）．

第20図　青岩から見る兄倉山（吉崎御嶽山）

兄倉山の石造文化

(1) 八海山提頭羅神王立像

御嶽神社から山頂に登る山道には，御嶽信仰に関連した石造の神々や天部の仏が祀られている．下仁田で最も古い御嶽教関連石造物はこの山にある．

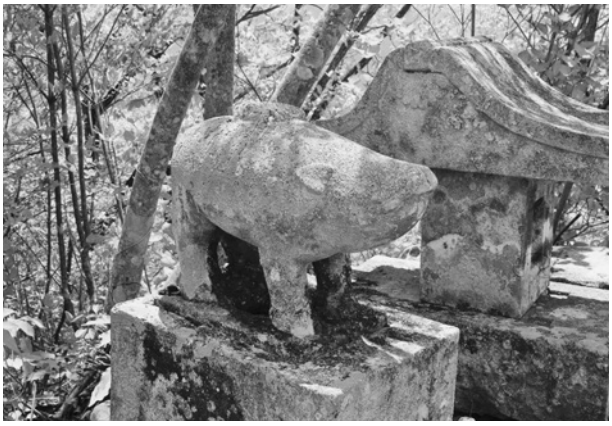
頂上直下の「八海山提頭羅神王」で文化3年（1806）の銘があり，小沢岳山頂の大日如来座像の文化6年（1809）より3年前の建立である．この像には奉納者の銘もあり，「願主　松井田講中　馬山講中　南蛇井講中」と書かれている．これらの地域には，早い時期から御嶽教の先達がいて，それぞれに講が組織されていたものと推測される（第21図）．

第21図　下仁田で最も古い御岳石造物

(2) 山頂の石造物

山頂には3基の石造物がある．石室2基があり，1基は破損している．破損していない石室には文久2年（1862）の文字が見えるが，御嶽信仰と関連するかは疑問である．

イノシシの基部が残され上部尊像部分が欠落した石造物がある（第22図）．天部の仏像辞典等で調べると，イノシシに乗る仏像は「摩利支天」しか存在しない（第23図）．御嶽教も摩利支天を祀ることから，イノシシの上には，摩利支天の石像が乗っていたことであろう．ことによると裏側の崖に落下しているかもしれない．摩利支天の台座には同じく文久2（1862）年の銘がある．



第22図　イノシシの基部

第23図　摩利支天像
（東京大学学術資産等アーカイブズポータル HP）

⑶ 御嶽三座神

参道中腹の杉林に御嶽教の本尊となる3躰の石造物がある．御嶽山座王大権現を中心に八海山提頭羅神王が右に，左には三笠山頭利天がまつられている．建立は明治元年（1868），奉納者は栗山村中と記されている．栗山村を挙げて奉納したものであろう（第24図）．

第24図　御嶽三座像

⑷ 三十六童子

参道の山道に，三十六童子の銘記板碑の石造物が点在する．三十六童子は，大日如来の化身である不動明王に眷属（けんぞく）する童子である．脇童子の制吒迦童子，矜羯羅童子が有名であるが，これに六童子が加わり八大童子が眷属する．六童子に2人ずつ眷属すると12人となり，さらに2人で24人，合わせて36人の童子になる計算であるが，制吒迦童子，矜羯羅童子は八大童子にも三十六童子にも加わっている．兄倉山に36躰がそろっていたかは疑問である．

⑸ 御嶽神社の石造物

ほたる山公園の上に御嶽神社があり，社殿はないが，ここの境内にも，多くの石造物がある．正面の「御嶽山座王大権現」の台座の銘文が資料として重要である．解読不明文字が6字ほどあるが，大旨を記すと次のように考えられる．

『御嶽山神像青銅の王坐は，慶応元（1865）年7月に，神戸喜茂を発起人として信徒の喜捨を興して建立したが，明治30（1897）年1月に盗難に遭ってしまった．信者は相談し，今度は鉄鋳造の像を建立したが，これも再び盗難に遭ってしまった．霊代よりの威厳を損なうものである．尊像は石坐を以て伝えられているので，今度は盗まれることは無い．』（第25図）

御嶽山神像青銅之
玉坐者慶応元年丑
年七月成干発起人
神戸喜茂之■斡旋興
信徒之喜捨■明治
三十年一月為盗所
持志信徒相等興謀
■因■形造鋳之■
復遭盗難損重威霊
代以石坐以伝干無
窮■■

第25図　「御嶽山座王大権現」の台座の銘文

小沢岳で紹介した子どもを抱く尊像が南牧村御嶽神社にも存在する．下仁田地方には2躰しか存在しない．木曽御嶽に大きな尊像が建立されているので，御嶽教の信者が建立したものに違いない．

まとめ

1　西上州の山岳信仰は，自然神信仰（山の神）と御嶽教のなかで普寛上人が広めた信仰である普寛講のみが存在した．

2　江戸時代後期から幕末，明治，大正まで約120年間栄えた山岳信仰が存在したと思われる石造物が把握できる．

3　一部の山岳に，秋葉信仰や飯塚信仰の形跡が見られるが，崇拝対象は代参招来と思われる．

4　普寛上人が，西上州山岳に直接参拝したことの実証はできない．おそらく先達指導者が，普寛講を組織し信仰を広めたことと思われる．

5　最も古い年代が明記された石造物は，兄倉山山頂直下に存在する八海山神で文化3年（1806年）であり，普寛上人の遷化から5年後となる．

6　崇拝対象の石造物を設置した山岳は，当時の街道から見て美しい山岳が選ばれている．

7　妙義山や稲含山など，すでに大きな神社や修験の信仰が実存した山岳中心には，普寛講は入山していない．

8　西上州の山岳信仰に関する古文書はほとんど発見されていない．御嶽教は口伝による伝えが多く，古文書に残されない傾向にある．

9　西上州を訪れる登山者に，山岳信仰文化財をどう広報するか，またその石造物をどう保護するかが，今後の課題である．

以上のまとめから，西上州の山岳信仰の歴史的意義を考えると，幕末から明治の混沌とした時代に，山岳に信仰対象を祀り，山岳を修行の場，自己鍛錬の場として登山し，心の安定を求めた宗教が，西上州に存在したことである．

参考文献

五來　重（1970）山の宗教＝修験道．淡交社，260p.

川勝政太郎（1978）日本石造美術辞典．東京堂出版，369p.

加治由幸　古文書なびHP．古文書便覧，梵字と種子の一覧．（2022年2月14日閲覧）http://komonjo.rokumeibunko.com/binran/bonji.html

国宝社編（1992）続日本紀（上）宇治谷孟全現代語訳．講談社学術文庫，432p.

講談社編（1980）日本霊異記（下）．中田祝夫全訳，講談社学術文庫，320p.

上毛新聞社出版局編（1990）群馬の山歩き130選．上毛新聞社，265p.

前田良一（2006）役行者．日本経済新聞社，402p.

松尾　翔（2007）西上州山村の石仏たち．青蛾書房，287p.

宮家準編（1985）御嶽信仰．民衆宗教史叢書．雄山閣，331p.

南牧村誌編さん委員会編（1981）南牧村誌．南牧村，1543p.

南牧村文化財調査委員会編（1991）南牧村の石造文化財．教育委員会，62p.

中村　元・久野　健編（2002）仏教美術事典．東京書籍，1035p.

錦織亮介（1983）天部の仏像事典．東京美術，288p.

下仁田町教育委員会編（1976）下仁田の石造文化．下仁田町教育委員会，111p.

菅原壽清（2002）木曽御嶽信仰－宗教人類学的研究－．岩田書院，354p.

東京大学学術資産等アーカイブズポータルHP．https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/97c3da83-b8b2-407d-b818-f5bef37af624#?pos=188

和歌森太郎編（1975）山岳宗教の成立と展開．山岳宗教史研究叢書．名著出版，388p.

ウエストンW．（山崎武生訳）（1976）日本アルプス・登山と探検．日本山岳名著全集，10，三笠書房，304p.

（要　旨）

堀越教之（2022）西上州の山岳信仰 上．下仁田町自然史館研究報告，7，11-20.

江戸時代の後期から明治，大正，昭和10年代までの約100年間つづいた西上州の山岳信仰の石造物を調査した．この山岳信仰を広めた普寛行者が，下仁田地域に来山したという証拠はどこにもない．普寛行者が遷化してから5年後，その弟子たちが下仁田地域に広めた山岳宗教である．上では御嶽教山岳信仰の概要と，その信仰が広まった兄倉山と小沢岳の信仰石造物を検討した．